

NAGANO!

内容見本

<http://osito.jp>

萌えぎのエレン

目次

はじめに	3
第1章 永野護とは	4
第2章 ゼータガンダムと1985	21
第3章 ファイブスター物語とモーニング娘。	33
第4章 ロボットは顔が大事	38
あとがき	40
永野護関連書籍一覧	44
新旧設定対応表	46

はじめに

この同人誌は、アニメのデザイナー、永野護について書いた本だ。永野の漫画『ファイブスター物語』（通称 FSS）の魅力について。ぼくが永野を好きでいられる理由。そして、ぼくが永野のファンになった 1985 年前後の出来事や、当時ぼくが感じていた思い。そのようなものを書いた。

1986 年の連載開始から来年で 30 年になる FSS とは、2014 年現在、ぼくが唯一読み続けている漫画だ。

この同人誌では、FSS について、例えばその元ネタがスターウォーズや忍者武芸帳であるということや、追究しない。そして、FSS 論のような論文でもない。漫画そのものよりも作者の永野護に対してのファン心理、ぼく自身の思いを多く書いた。FSS は好きだけど作者の永野に対してはそうでもないという、作品のみのファンにとっては読みづらい文章であるかもしれない。ぼくにとっては、FSS が面白い理由とは、作者の永野護が面白いということとイコールだ。そしてぼくは、一方にある「永野護＝神」のような安易な崇拝を行わない。ぼくにとって永野とは、才能があってクレイジーな兄ちゃんではない。ただし、その才能がとんでもない、唯一無二だという、それだけのことだ。若かったぼくが、何かとんでもないかっこいいものに憧れた。そしてそれを、ぼくはロックと呼ぶ。永野護はロックを教えてくれた。ぼくにとっては、単純な話だ。

なぜぼくがこんなにも長く、この漫画の読者でいられたのか。それは、もちろん、面白いからだ。しかし、この漫画の面白さを説明することは、非常にむずかしい。この漫画の分かりづらさが、たびたび指摘されていることは承知している。しかしぼくは、それを弁明したりしない。では、「面白い」とは、どういうことなのか。この同人誌では、FSS を論ずることがそもそも不可能だという前提に立ち、この漫画の魅力について、ぼくが感じてきた、言葉にできる限りの説明を行う。そしてぼくが、永野護が月刊誌に漫画を連載し始めた 1985 年に感じていた、ある思いを吐露する、昔話も書いた。

この漫画が分かりづらいのは、作者の永野が週刊漫画雑誌のような「読み捨てられる」、消費されるだけのものを描きたくないという意志の現れであり、そして、この漫画が一般的な漫画の文脈で描かれていないことが理由なので、慣れてくださいとしか言えない。読書もしない、大学にも行かない、ぼくのような人間でも読めるのですから、好き嫌いは別として、読めないということは、ありません。

なお、この作品は漫画本編の単行本以外にも、作者の永野による公式の解説書が多数刊行されているので、ご不明の点については、ぜひとも、そちらをご覧ください。

第1章 永野護とは

1960年生まれ。京都府出身。東京都内の大学に通いながらライブハウスで音楽活動を行う。同時に川村万梨阿とともにアニメファンサークルに所属し、『うる星やつら』や『機動戦士ガンダム』などのアニメのイベントにコスプレ姿で参加する。1983年、知り合いのアニメスタッフの紹介で、ガンダムなどで知られるアニメ製作会社の日本サンライズに入社。同社専属デザイナーとなる。1984年に放映されたテレビアニメ『重戦機エルガイム』においてキャラクターとメカニックのデザインを担当。1985年放映のテレビアニメ『機動戦士Ζガンダム』（ゼータガンダム）に登場するロボットなどをデザイン。同年に角川書店から創刊された月刊ニュータイプにて漫画『フル・フォー・ザ・シティ』連載開始。1986年、月刊ニュータイプにて漫画『ファイブスター物語』連載開始。サンライズ退社後も1998年放映のテレビアニメ『ブレンパワード』のメカニックデザインを担当。2012年、初監督作品となる劇場用アニメ『花の詩女 ゴティックメード』公開。

■ファイブスター物語とは

ファイブスター物語とは、永野護が描く漫画。通称FSS。月刊ニュータイプ1986年4月号から連載。ジョーカー太陽星団という架空の世界を舞台に、騎士とファティマが操縦するロボット同士が剣で戦う。なお、永野本人は漫画家を名乗らず、現役のデザイナーであるとしている。

単行本『ファイブスター物語リポート1』（角川書店）に掲載された永野のインタビューによると、日本サンライズ入社後に永野が提出した企画を富野由悠季がアニメ化したのがエルガイムであり、この漫画は永野が元々構想していた、その企画内容がベーシックになっている、とのこと。

この漫画には、作者の永野が作成した年表が存在する。物語の始まりから終わりまでの、何千年にも渡る大まかな流れを記した年表が、連載開始の時点で公開されている。つまり、この漫画は結末があらかじめ決められているのだ。その年表には追加された新たな設定を反映する加筆が数回行われており、新刊単行本の巻末などには常に最新版の年表が掲載されるが、結末を含む基本的な物語の骨格は、連載開始から変更されていない。

新たな展開に必要な一連の膨大な作業（ストーリーの構築やデザインなど）、その他の事情により連載の中断を繰り返してきたが、2014年現在も連載中。なお、2013年の連載再開時に、大幅な設定変更が行われた。

騎士

騎士とは、ロボットを操縦することが出来る能力を備えた人間の総称。ヘッドライナー（天を取る者）とも呼ばれる。普通の人間をはるかに超える反射神経や運動能力を備えており、その能力を持って生まれた者は、通常、国家の騎士団などに属し、兵として必要な訓練や剣の指南を受ける。

騎士団

この世界では騎士の操縦するロボットが最も強い兵器であり、すべての戦争の勝敗はロボット同士の戦いによって決着する。騎士団とは国家の軍隊のトップであり、その規模は所有するロボットや騎士の数で決まる。

剣聖

強い騎士には天位の称号が与えられるが、そのなかで最も強い者に与えられる最高位の称号。一時代に一人しか存在しない。

ファティマ

人間のかたちをした人工生命体。ロボットと操縦する騎士をサポートするためだけに生み出された（騎士ひとりでロボットを動かすことは出来ない）。騎士の超高速な動きをロボットに伝達し、ロボットの動作を制御管理するファティマは、そのために必要な反射神経と運動能力、そして生体コンピューターとでも呼べる高度な情報処理を行う頭脳を持つ。その身体能力は騎士には劣るが一般人をはるかに超える。その多くが女性型（少女）であり、通常の間人よりも長寿命で、しかも死ぬまでその若さを保つ。兵器として扱われ、行動には多くの制約が伴い、人間に絶対服従するようにプログラムされている。定期的に行われる「お披露目」にてパートナーとなる騎士を選ぶことが出来るのは、数少ないファティマの権利である。ちなみに、ジョーカー太陽星団においては高度に医学が発達しており、手足などがばらばらになっても脳さえ残っていれば再生可能である。また、糖尿病などの内臓疾患も過去のものとなっている。医学の頂点が人工生命体ファティマである。ただし、死んだ人間を生き返らせることは出来ない。

バスターランチャー

最強にして最悪の破壊兵器なので星団法（この世界での法律）で使用が禁止されている。しかし実際には標準装備する戦艦やロボット（ごく一部ですが）もある。爆心地は時空が歪んだりする。

魔法使い

この漫画は SF ではないので魔法使いが登場する。彼らは騎士と同様、国家に属し戦争に参加する。強い魔法使いは騎士を倒すことも出来る。暗殺に魔法使いを使う国家の秘密工作組織もある。

星 団 歴

ばらばらだった4つの太陽系がまとまって太陽星団となり制定されたのが星団歴である。単行本の巻末などに掲載されている年表によると、物語のラストとなる星団歴7777年に5つ目の太陽が出現する。ちなみに、1500年周期で太陽星団に接近するスタント遊星は、太陽星団の惑星に何かしらの被害をもたらす厄介な存在である。

超 帝 國

星団歴以前に存在し、世界のすべてを支配していた国家。ありとあらゆる科学技術の頂点を極め、それは現在（星団歴）のジョーカー太陽星団をはるかに上回る。ロボットも騎士もファティマも魔法使いもバスターランチャーも、超帝國が生み出したテクノロジーの名残でしかない。とにかく超が付くからすごいらしい。どれくらいすごいのかというと、当時の皇帝がまだ生きている。さすがに生身の肉体ではないが、第5話から登場している。

星 団 法

ファティマの規制、バスターランチャーの使用禁止などが定められている。主役級の人物が星団法違反を犯すことが度々だが、それがないとお話にならないので仕方ない。

ミラージュ騎士団

通常、騎士団とはその国が持つ軍隊だが、連邦国家AKDの王である、この物語の主人公アマテラスは個人で騎士団を所有する。それがミラージュ騎士団であり、名前だけで実際には大したことないなど良くない噂も立てられるが、その真の姿を見た者には死が訪れるという。AKDはアマテラス・キングダム・ディメンスの略。ちなみにAKDにはミラージュ騎士団とは別に国家騎士団が存在する。

人類でない者たち

騎士を含めた全人類を超えた、上位の存在もこの物語に関わってくる。伝承でしか知られていない生き物であったり、我々が知っている数々の神話に登場するような、神としか呼べない者など。彼らは人類を傍観しつつ、物語の時間軸を飛び越えて出現することもある。

ファイブスター物語の世界にて繰り広げられている国家間の争いとは、領土拡大のためのゲームであり、そのために最も効率が良いのが、ロボットでの戦闘だ。この世界で最も強いのがロボットであり、騎士は国家元首の代理人として戦う。

この物語の主役。ロボットを操縦する、騎士と呼ばれる者たち。

騎士とは、かつての超帝国の時代に生み出された強力な戦闘人種の血が薄まって、現在のジョーカー太陽星団の人類に受け継がれたものだ。すべての人類のなかから、ごく低い確率で騎士が誕生する。どの家系から騎士が生まれるかは分からないのだが、騎士として生まれた者は、否応なくその運命を背負うことになる。騎士とは戦い、すなわち人殺しが仕事となる。騎士として生まれた者が騎士とならない人生を選ぶことは出来ない。それがこの世界だ。

騎士の常人離れた反射神経でなければ、人間の何倍もの大きさのロボットを人間と同じように動かすことが出来ない。また、騎士の能力はファティマのように人工的に作り出すことが出来ないで、人工生命体の騎士は存在しない。もし騎士級の強さを持ったファティマがいたとしたら、それは星団法違反となる。

とにかく、この物語の世界では、騎士がロボットに乗って戦う。ロボットの主な武装は剣であり、剣の腕がすべてを決めるといっていいだろう。ロボットに乗っていない騎士同士が剣で戦うこともある。

ロボットを操縦する騎士が名乗りを上げて戦う。この物語の剣技とは、日本の剣豪小説の世界であり、抜刀術だ。最強レベルの騎士であれば、抜いた瞬間に勝敗が決まる。騎士の操縦するロボットが高速で動くのは、そのためだ。そして、この物語の剣技には「真空斬り」が存在する。腕の立つ騎士であれば、音速に近い腕の動きで衝撃波を発生させ相手を倒す。これはロボットの剣でも可能だ。

さらに強い騎士は剣を持たずにそれを行う。手首の微妙な返しで竜巻を発生させ遠くの敵を倒す凄腕の騎士もいる。

騎士にとって必要なスキル。剣の腕はもちろんだが、最も重要なのは、目の前にいる敵がどれほどの腕を持っているかを見抜くことだという。騎士の強さのレベルは、その何気ない動作や気配から読み取れるものであり、それを見抜く必要がある。なぜなら、確実に自分よりも強い者には剣を向けてはならないからだ。しかし、最強レベルの騎士は、その気配を完全に消し去っている。

騎士のなかには、魔法使いのスキルを備えた者もいる。剣の腕が最強で、しかも魔法を使う騎士がいたとしたら、相手に勝ち目はない。もちろん、そんな騎士は数名しかいない。

そのような、剣聖レベルのとんでもない強さの騎士は例外であり、登場する騎士の強さには、実はほとんど差がない。だから実際の戦争での勝敗は、騎士団の規模とその戦術によるところが大きい。

つけ加えておくと、騎士とは、絵に描いたような武士道精神の持ち主（真面目で寡黙な人物）ばかりではなく、クレイジーな奴ら、または、お笑い芸人のような者も少なくない。それがこの漫画の独特の雰囲気を作っている。そして、強い騎士ほど面白おかしいキャラクターであることが多い。

■主人公アマテラスとミラージュ騎士団

ここでは、ぼくがこの漫画で最も好きなキャラクター、主人公アマテラスについて少し書いておこうと思う。

この漫画、ファイブスター物語の英語表記は「The Five Star Stories（ファイブスターストーリーズ）」となっている。2014年現在、第6話が連載中のこの漫画は、ひとつの話を長期に渡って描く。これまでの1話から6話まで、それぞれ主人公が異なり、独立した漫画作品として読むことも可能であり、だから「ストーリーズ」なのだ。他の漫画雑誌、漫画家であれば、いったん連載を終了して新シリーズ開始とするような、続きでありながら別の作品となる場合がある。そのようなシリーズの集まりが、ファイブスター物語だ。

この漫画の、全体を通しての主人公は、惑星デルタ・ベルン全体を統治する連邦国家AKDの王、天照の帝、通称アマテラスだ。しかし、別の話では、AKDと敵対するフィルモア帝国の若い皇子が主人公となる。また別の話では違う国の騎士が主人公となる。そして、作者の永野によると、単行本9巻からしばらくの間は、主人公がアマテラスから、超帝国の皇帝、炎の女皇帝ナインに移っているのだという。現在連載中の6話ではバッハトマ魔法帝国は悪の枢軸として描かれているが、もし彼らが主人公であれば、バッハトマの「正義」だって当然ある。とにかく、誰を主人公とするか、どの国の目線で物語をみるか、それによってまったく違う物語となるのが、この「ストーリーズ」の醍醐味だ。

ぼくは、この漫画を主にミラージュ側の視点で見ている読者だ。アマテラスとその騎士団、ミラージュ騎士団の物語として読む。ミラージュ騎士団とは、アマテラスが個人的に所有する騎士団である（ミラージュ騎士団のモデルはテンプル騎士団）。

普通、騎士団とは国家の軍隊であり、その運営には莫大な金がかかる。アマテラスは、自らの持つ広大な土地（10カ国ほどの面積）の借地料などの収入があり、それによって運営を個人でまかなう。AKDには国家騎士団であるゴーズ騎士団が存在するにも関わらず、なぜアマテラスは個人で騎士団を持つのか。まず、そのことからして面白い。ちなみに、ミラージュ騎士団は事実上のAKD筆頭騎士団となっている。つまり、その強さにおいてゴーズ騎士団を上回る。ではあるが、ミラージュ騎士団はアマテラスの個人的な都合によってしか動かない。だからゴーズ騎士団が不要とはならない。

青年にしかみえないアマテラスは、実際には何百年、何千年も生きている。彼は不老不死であり、数々の神業を持つ。普段は男性だが女性に変身することもできる。騎士としての腕も強力で、戦闘ロボットの設計開発も行う。しかも魔法使いの力もある（魔法使いの

第2章 ゼータガンダムと1985

ここでは、ぼくが永野護のファンになった頃の話を書いておきます。ファイブスター物語という漫画が誕生する少し前に、ぼくが何を感じてきたか。

■作らない模型ファン

まず、ぼくが「作らない模型ファン」になった話から。

小学生の頃は国産自動車の名前がすべて言えたしスーパーカーブームもあった。国鉄限定だが鉄道も好きだった。レゴブロックやタカラのマイクロマンを集めたりもした。プラレールに飽きて鉄道模型に興味を抱いて、福島市の繁華街にある老舗の模型店でNゲージを買おうと思ったとき、店員が、組み立て式の模型を薦めてきた。ぼくは完成品のNゲージの模型が欲しかったのに、なぜわざわざ自分で組み立てるような面倒なことをしなければならないのか。はっきり言って不愉快だった。その店員がガレージキット業界で知る人ぞ知る造形のエキスパートだということは、後で知った。

鉄道模型に興味を抱く前に、自分で組み立て塗装して完成させるプラスチックキット、いわゆるプラモデルを買ったことはあった。タミヤの24分の1のカウンタックだったと思う。組み立てているとき、楽しかったかもしれないが、あまり覚えていない。塗装はしないでそのまま組み立てた。図工の時間に絵を描くときも、色を塗るのが苦手だった、というよりも、色を塗ることに興味がなかった。

ガンダムのプラモデル、ガンプラのブームがやって来た。実家の近所に出来た模型店が小学校の前でビラを配ったりしていた。アニメのガンダムはほとんど見ていなかったが、ブームには乗った。100分の1のドムを買ってきて、組み立てて、なぜか黄土色のスプレーを適当に吹きかけて、完成ということにした。でも結局、それっきりだった。ガンプラを買うことは二度となかった。

しかしぼくは、模型店に通うようになった。自分で組み立てたいとは思わなくなっていたけれど、プラスチックキットそのものにも興味がなくなったわけではなかった。近所だったからという理由だけではなかったはずだ。それがなぜなのか自分でも良く分からなかった。

そして、その模型店でエルガイムの設定資料の本を購入した。その本はバンダイが模型店のみで販売していたものだった。バンダイ以外にも、例えばマクロスの本が売られていたはずだった。100円くらいだったと思う。あとは、タミヤから出していた模型入門の漫画などもあった。可愛い女の子が模型制作のあれこれを解説するというものだった。ぼくは一時期、そういう本ばかり買っていた。プラスチックキットを取り上げる記事そのものを、ぼくは面白いと感じていたのかもしれない。玩具メーカーのタカラが出していたデュアルマガジンという雑誌も買って読んでいた。これは書店で販売していた。ボトムズ

のバリエーション展開の記事を面白いと思って読んでいた。アニメのボトムズはほとんど見ていなかった。この雑誌で藤田一己や明貴美加の名前を知った。しかし、なぜかホビージャパンは読んでいなかった。

そして、ファンロードを読むようになって、あさのまさひこという男に興味を抱いた。彼がモデルグラフィックスで仕事を行うのは、それより少し後の話になる。

■見えていたはずなのに覚えていない

この同人誌では、永野護と FSS に興味を持って頂けるような文章を書くことを目的としているが、解説書の丸写しになっては意味がないので、ほとんど何も見ないで書いた。だから、間違った記述があるかもしれないので、本書に資料的価値はない。そして、この本に書いてあることは、ぼくが見てきたアニメの歴史なのであって、だから「正史」ではないし、ぼくは、あの頃のすべてを覚えているわけではない。そして、見てきたはずなのに都合よく記憶が改変されていることがある。

「ガンダムに女性ファンがいなかった」という何者かのツイッターの書き込みが話題となったことがあった。この書き込みに対して、ものすごい数の批判があった。ガンダムの富野監督は、視聴率の低かったガンダムを支えたのは、アフレコ現場を見学に来た女性ファンだったと発言しており、それを知るファンは多かった。また、シャアやガルマなどの美形の男性キャラクターが女性ファンに人気だったことは、当時のアニメ雑誌に掲載された読者投稿でも明らかだ。そのような当時の出来事を知らないのか。寄せられた批判は、だいたい、そのようなものだった。この「騒動」を受けて、ぼくは思うところをブログに書いてみた。

富野監督が当時の女性ファンに感謝しているという発言は、ぼくは後で知った。そして、アニメ雑誌で当時も女性ファンが盛り上がりださうことは、1983 年から読み始めたファンロードという雑誌を見て、容易に想像がつく。だいぶ後になってあのファンロードという雑誌は女性中心の、いわば女性誌だったのだと友達からきかされて、ぼくは初めて、ああそうだったのかと気づく。それは、当時のぼくはファンロードを、あさのまさひこや長井健（ながいけん）、そして中森一郎などの男性陣の活躍を楽しみに読んでいたからだった。確かに女性投稿者が多かった。一本木蛮、猫田猫美、湖東えむ、椎名崇、猫乃都など、もっと多くの女性が活躍していたけれど、あさのが取材そっちのけでアイドル現場に行く、台湾で大暴れ、そして長井と下らない言い争いをしていたり、その辺がぼくにとつてのあの雑誌のメインだったから、その他のことは、すっかり忘れてしまっていた。ぼくがブログに書いたのは、このような内容だった。

このブログに対する、はてなブックマークのコメントで、このぼくのブログ記事を「見えていたはずなのに記憶に残ってないという話」として読んだというものがあって、途中からぼく自身の勘違いの話になってしまっていることを、そこで気づいた。だから、ぼく

が極めて私的な歴史しか語れないことを考慮して頂いた上で、続きを読んで欲しい。

■永野護と小林誠のZガンダムという時代

ぼくが初めてリアルタイムでオンエアを全話チェックしたアニメ作品は、1985年に放映開始された富野由悠季監督の『機動戦士Zガンダム』（ゼータガンダム）だった。なぜこのアニメだったのか。最初のガンダムに熱心になれなかった自分にとって、ここから見ればガンダムファンとしてスタートラインに立てる、やり直しがきくとも思っただろうか。

このアニメが面白かったのかときかれても、どうだったか忘れてしまった。あの当時の「ささくれた」気分が反映されていたのかもしれないし、放映当時ならともかく、現在では他人にお勧め出来るようなものではない。目を通しておけば富野監督のガンダム映画『逆襲のシャア』を楽しむことができる、その程度の作品でしかない。泥沼の人間関係は庵野秀明監督のアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』に影響を与えたのかもしれない。

アニメの内容よりも問題だったのは、メカデザイナーが乱立してモビルスーツのデザインラインが滅茶苦茶になったことだった。一応書いておくと、モビルスーツとはガンダム世界でのロボットの総称だ。この頃すでに永野護ファンとなっていたぼくにとっての楽しみは、アニメ雑誌に掲載されていた永野デザインのモビルスーツだった。前作エルガイムで永野が考案したロボットの内部骨格、ムーバブルフレームはゼータガンダム世界でのモビルスーツ設計の標準となった。永野のデザインはリックディアスや戦艦アーガマ、ノーマルスーツ（宇宙服）やモビルスーツコクピットなど本編で採用されたものの他に、永野版ガンダムと呼ばれる準備稿も存在していた。それらの通称「永野ガンダム」は当時のアニメ雑誌に掲載されていて、ぼくは、それらのデザインに夢中になっていた。これがもし本編に登場したら、すごいことになるだろう。そのような想像をふくらませていた高校生だった。永野版ガンダムは3種類ほどのバリエーションが公開されていたはずで、それらは藤田一己によって百式としてデザインし直され、または番組後半の主役モビルスーツであるゼータガンダムの骨格となった。そして、オンエアと同時に発行された富野由悠季による小説版ゼータガンダムの挿絵は永野が手がけていて、永野版ゼータガンダムなどのオリジナルデザインが披露されており、これも近未来のガンダムと呼べる斬新なものであった。

しかし、永野護デザインのガンダムが本編に登場することは、なかった。永野ガンダムがテレビに登場したら、すごいことだろうと想像していたが、そんなことはなく、当時、問題作と呼ばれたこのテレビアニメも、そういった意味では常識の範囲内だったのである。

話を戻すと、当初、永野は、富野監督からの要請もあって、この作品のメインのデザイナーとなるはずだった。しかし、リックディアスや永野版ガンダム案などのモビルスーツのデザインに対してスポンサーなどからの反発があり、早々に降板させられた。この初期

の段階で永野がデザインしたリックディアスなどはアニメ本編で使われたが、永野のスタッフクレジットはデザイナーではなくデザインワークスというよく分からない役職となった。その後、主役のゼータガンダムなど多くのデザインは、元々のガンダムのデザイナーである大河原邦男や藤田一己ほか多くのデザイナーの共同作業によって行われた。デザイナーの乱立と、それに伴うデザインラインの統一性のなさは、ゼータ世界での敵味方が入り乱れた状況に合わせて、なかば正当化された。

そして、再度デザインを依頼された永野はキュベレイやハンブラビのモビルスーツデザインを提出。キュベレイは敵ネオジオン代表ハマーン・カーンが搭乗するモビルスーツとして、目覚ましい活躍をみせた。現在ではリックディアスやキュベレイは歴史に残る傑作モビルスーツとなっているが、当時の評判はよくなかった。それらが「モビルスーツらしくない」と、保守的なガンダムファンから罵倒されたことを、ぼくは今でも忘れることはない。永野ファンのぼくに言わせれば、そいつらは旧ガンダムに取り付かれた、悪しき亡霊だった。

百歩譲って、「ガンダムのことを大切に思っている」、彼らの発言は仕方なかったとしても、当時ぼくが最も不愉快だったのは、最初にハイザックのようなものを出してきたことだった。ハイザックのデザインそのものよりも、「とりあえず敵モビルスーツとしてザクを出しておけ」のような安易な態度が許せなかった。そもそも、ガンダムの続編であり、ゼータガンダム登場までの主役モビルスーツがガンダムマーク2だ。ガンダムと名の付く作品の主役がガンダムであることには、とりあえず異論はない。しかし、だ。

最初のガンダムにて、敵のモビルスーツは、ザク、グフ、ドム、ゲルググと進化してきた。永野デザインのリックディアスはドムに似せてデザインされたものだが、反発があったことから分かるように、それは斬新なラインだった。前作から7年が経過しているのだから、モビルスーツだって進化する。リックディアスは、そのようなデザインであった。ザクに似せることが悪いわけではない。ハイザックのデザインにはリックディアスにみられるような進化が感じられなかった。名誉のために書いておくと、主要モビルスーツのデザインをまとめた藤田一己の才能をぼくは認めている。デュアルマガジンでの彼の仕事も優れたものであった。

ハイザックの保守的なデザイン、これは誰が見てもザクだというデザインは、スポンサーの指示に違いない。リックディアスのデザインを認めず永野を降ろした保守的なスポンサーだからだ。

ぼくがこの件での不満をツイッターに書いていたとき、こういう意見を頂いたことがあった。

「それだけザクの性能がすごいということなのでしょう。ジオンの技術が」

なるほど、基本設計が優れている機体、名機であるということ。それは分からないでもない。例えば、小林誠がデザインしたマラサイは、ザクに似たものだが精悍なデザインラインであり、これならば後継、モデルチェンジとしてふさわしいとぼくは感じた。こちら